

2022年1月30日 礼拝説教要旨

詩編講解説教95「迷いを捨てる道」

詩編95：6～11、ヨハネ10：11～16

第95編では人間が「羊」に譬えられています。これは旧約聖書においては決してめずらしいことではありません。同じ詩編では49編15節「陰府に置かれた羊の群れ、死が彼らを飼う」とあります。また「主は羊飼い」で有名な23編も、わたしたちが羊の群れであることを示しています。またイザヤ書53章の「わたしたちは羊の群れ、道を誤り、それぞれの方角に向かって行った」（53：6）を思い浮かべる方もいらっしゃるでしょう。そのように聖書はわたしたち人間を羊に譬えます。

しかしなぜ羊なのか。それは羊の生態から来ています。詩編23編を読んだ時も触れましたが、動物には帰巢（きそう）本能があります。例えば、渡り鳥は何千キロと旅をしてまた同じところに戻ってきます。犬も飼い主のところに戻ってくることがあります。ところが羊はこの本能があまり発達しておらず一度群れからはぐれると、あの迷い出た一匹の羊の譬えのように羊飼いに探してもらわなければ迷い出たままになってしまう。ですからどうしても羊を世話する羊飼いの存在が必要となります。でも逆を言えば、羊飼いのもとにあれば羊は安泰であります。そのことを示すのが7節の部分です。「主はわたしたちの神、わたしたちは主の民、主に養われる羊の群れ、御手の内にある羊」

これは神さまとわたしたちの正しい関係のことでもあります。「主はわたしたちの神、わたしたちは主の民」神さまがわたしたちの神さまであり、わたしたちが神さまの民として生きるならば、たとえ羊のように臆病で迷いやすいわたしたちであっても神さまの御手の中で守られ、養われて安泰なのです。それゆえ「今日こそ、主の声に聞き従わなければならない」（7節）と続きます。羊は耳がよく、しかも羊飼いの顔や声を識別することができると言われます。今日読んだヨハネによる福音書で「羊もわたしを知っている」「わたしの声を聞き分ける」とありました。羊であるわたしたちは、羊飼いである神さまの声を聞いてこれに従う必要があります。

そのわたしたちが聞くべき主の声が8節以下のところです。その内容はイスラエルにしてみれば耳の痛い忠告です。「メリバやマサでしたように心を頑なにしてはならない」とあります。エジプトを脱出したイスラエルの民が喉が渇いてモーセに不平を言う話です。イスラエルの人々は「果たして、主は我々の間におられるのかどうか」（出エジプト17：7）と言って神さまを疑いました。このことで神さまは怒りを覚えられ「わたしは怒り彼らを憩いの地に入れないと誓った」（11節）のです。「憩いの地」つまり約束の地カナンに入れられないということです。このことについては民数記に記述があります。「主はモーセとアロンに向かって言われた。あなたたちはわたしを信じることをせず、イスラエルの人々の前に、わたしの聖なることを示さなかった。それゆえ、あなたたちはこの会衆を、わたしが彼らに与える土地に導き入れることはできない」（20：12）

その通りモーセもアロンも約束の地に入ることはできませんでした。申命記にはモーセの最後のことが記されており、モーセがピスガの山頂に登って、はるか約束の地を望み見て死んだことが記されています。約束の地に入ったのは、エジプトを脱出したその次の世代ということになります。そこに神さまの裁きがあります。出エジプトという神さまの救いの御業を体

験しながらも、その時の渴きに負けて神さまに不平を言い、心を頑なにしました。「果たして、主は我々の間におられるのかどうか」と疑った。この不信仰が40年間の荒野の放浪の原因となり、その世代は約束の地に入れないのです。羊のように迷いやすい上に、素直ではない。頑なであること。「頑迷」という言葉がありますが、頑固で分からず屋。それがまぎれもないわたしたちの姿なのです。

わたしたちの歩みを振り返る時に、このイスラエルの姿と重なることが多いのではないのでしょうか。平穏な時はいいでしょう。でも何か試練があると「果たして、主は我々の間におられるのかどうか」と疑い、神さまがいるなら証拠を示せと神さまを試すようなことをしているのではないか。あるいは計算高く、見返りを求めるようなこと、取引をするようなことをしているのではないか。これだけすれば、神さまも言うことを聞いてくださるだろう。そういう算段をする。素直に信じることを、従うことができない。その上、頑固で自分を曲げない。それで迷うのですからどうしようもないのです。そのわたしたちが約束の地、憩いの地に入れないのは当然ではないのでしょうか。

でも、だからこそこのような頑迷なわたしたちを約束の地に導くためにまことの羊飼いとしてイエス・キリストが与えられました。本当ならば、約束の地に入る資格はないでしょう。その頑なさゆえに神さまの怒りをかっているのです。でもその神さまの怒りをキリストはその身に負ってくださいました。そして十字架で死んでくださったのです。今日読みましたヨハネ福音書にその羊飼いであるキリストのことが書いてあります。「わたしは羊のために命を捨てる」(10:11、15)と繰り返されます。このような羊のために主は命を捨ててくださいました。そのようにしてわたしたちを憩いの地に、約束の地に導き入れてくださるのです。

その救いの御言葉、主の声をわたしたちは今日また新たに礼拝で聞きます。「わたしの道を知ろうとしない」(95:10)わたしたちのためにキリストがその道となり、もはやわたしたちが迷うことがないようにしてくださった。そしてそのためにご自身の命を捨ててわたしたちを憩いの地に招き入れてくださった。主の声とはこの福音の言葉です。今日こそ主の声に聞き従いましょう。